

## 地方だより

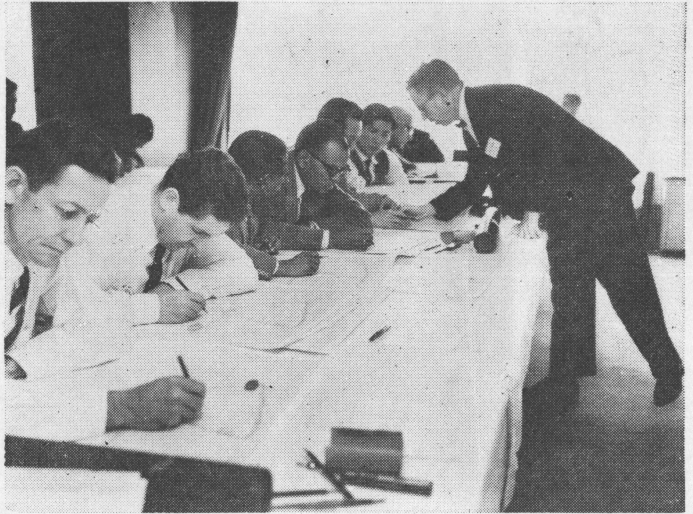
### 気象庁 総務部企画課 国際協力班

この2月ニューデリーで開かれた W.M.O. 第3回測器観測法に出席した本庁測候課長大田さんの話によると、この会議の次回開催地として、W.M.O. や欧米各国の圧倒的多数が東京を希望したそうである。だが日本は東京に招請したいと言った訳でなく、むしろその反対だったのであるが、彼らのこの強い希望はさもありなんと理解できる。なにぶん1カ月近い長丁場を毎日会議に明け暮れるのであるから、風光明媚で気候温和、かてて加えて人民また親切といったわりに満ちている日本という所は彼らにとって大変魅力的であろう。

今年の台風セミナーも、日本が他のいくつかの会議の開催を W.M.O. に断り続けた末やっと引き受けたもので、いわばいやいやながらであったが、お客様が来ればせせと世話を焼く、冷たくはどうしてもできないのである。「初めて日本において真のもてなし(Hospitality)の何たるかを知りました。」と嘆声をもらす某国学者もあった。

ところで、こうした会議などを通じ日本の気象学と気象事業の高度の成長が顕著に認識されはじめたようである。だいたい日本の気象学者は、例外もあろうが、特に国際的關係において無欲で宣伝ぎらいのように見受けられる。しかし正当に評価されることは過少評価をされてぶつぶつ内攻しているよりも遥かによいことである。

この現象を反映してか、W.M.O. その他の対外的活動を担当する国際協力班の業務は、ここ1年か2年に急激に増加した。それは、技術的問題の照会、測器、レーダー、ファクス等の資料提供、和文の研究とか報告の翻訳、技術専門家の派遣や研修生の受入れ、外来視察者の来訪、ついに下っては見も知らぬ異国の中学生の宿題のお手伝いなど、数え上げればきりが無い。こうした雑件に類するもの以外に、W.M.O. の業域の拡大も我々に大きな影響を与えている。W.M.O. は国連専門機関中で組織力と実行力を持った唯一の科学機関であるため、W.M.O. 条約



台風セミナーの実習風景

に規定された「気象観測と天気予報」という狭い殻内しは保守的位置にとどまることを許されなくなった、つまり時代が要求する放射能警報、気象衛星、水資源開発、津波警報、その他のサービス業務に首をつつ込まざるを得なくなったからである。このような体質の変化は W.M.O. のみならず世界各国の多くの気象事業に共通して見られるものである。

こういう訳で、当班も例のごとく人手不足という現状であり、できるだけ努力をしてもその結果、サービスが悪いぞと叱られることもあるが、当班だけが多忙というわけではなく、各部課の担当者も多かれ少なかれ同様に新しい仕事の圧迫を受けているはずであるから、同僚の士のご了解を切に願うしだいである。

少々愚痴っぽくなったが、当班一同はいまだに気力充実、ここ当分はサービス意欲に燃えているので、国際関係業務について何なりとご相談ご利用いただきたいと思う。

(和田顕太郎、水野精一郎記)

☆ ☆ ☆  
☆ ☆ ☆  
☆ ☆ ☆ ☆  
☆ ☆ ☆ ☆